



建築家  
インタビュー

建築は常に、社会の要請によって生まれる。  
ゆえに、建築の空間構成は  
人間の社会的営みという視点から発想されるべきである。

# 北川原 温

A t s u s h i K i t a g a w a r a

信州の大自然の中で蝶を追った少年は、やがて森と建築を一体化させたデザインで  
人と自然の対話を育むインタラクティブな環境を創造した。  
木の美しさにこだわった建築家が取り組んだのは、金属を排除した画期的な木造架構と、  
土木造成のために改変された敷地を自然に戻す修景作業であった。

NISSEI PARKING SYSTEMS



## CONTENTS

### Front Line

建築家インタビュー

## 北川原 温

Atsushi Kitagawara

03

### Arrangement 納入事例

- DO BOX (ディオ ボックス) 08
- 住友不動産大井町駅前ビル 10
- 茅場町高木ビル 12

### Information

- ホームページ情報/COMプレゼント 14
- 駐車設備メンテナンスの紹介 15

# COM TALK

## 高嶋ちさ子



「車好き」は我が家の血統ですね。小さい頃には休日になると、家族で父の運転する車でドライブに行くのがレジャーでした。  
スーパーカーブームの頃は夜になると家の近くの環八へ、兄と2人でよく写真を撮りに行ったりして。  
将来、スーパーカーに乗れるようにと、運転免許もちゃんと

「車の好き」は我が家の血統ですね。小さい頃には休日になると、家族で父の運転する車でドライブに行くのがレジャーでした。  
スーパーカーブームの頃は夜になると家の近くの環八へ、兄と2人でよく写真を撮りに行ったりして。  
将来、スーパーカーに乗れるようにと、運転免許もちゃんと

「車の好き」は我が家の血統ですね。小さい頃には休日になると、家族で父の運転する車でドライブに行くのがレジャーでした。  
スーパーカーブームの頃は夜になると家の近くの環八へ、兄と2人でよく写真を撮りに行ったりして。  
将来、スーパーカーに乗れるようにと、運転免許もちゃんと



## CHISAKO TAKASHIMA

プロフィール

1968年東京生まれ。6歳からヴァイオリンを始め、桐朋学園女子高等学校音楽科、同大学を経て、米エール大学音楽部大学院修士課程卒業。1995年にCDデビュー。コンサート活動を中心にCM、TV出演、月刊誌へのコラム等多方面で活躍。現在「芸術に恋して!」(テレビ東京系)の司会を担当。

「車の好き」は我が家の血統ですね。小さい頃には休日になると、家族で父の運転する車でドライブに行くのがレジャーでした。  
スーパーカーブームの頃は夜になると家の近くの環八へ、兄と2人でよく写真を撮りに行ったりして。  
将来、スーパーカーに乗れるようにと、運転免許もちゃんと

信州の実家は江戸初期に建てられた広大な庄屋建築。そこでは失われた社会のヒエラルキーが空間を構成していた。

大学で建築を学びましたが、私にはもともと建築家を志したという記憶がありません。自分が、いつ頃から建築を意識したのかわかりませんが、小さい頃の故郷の信州での体験が関係あるかもしれません。

父は長野の旧家の出身で、高校の教師をしていました。私は父の転勤にともなって県内のあちこちを転居して育ちましたが、益暮れは更埴市の山の中腹にある実家で過ごしていました。いわゆる古い庄屋の屋敷で、広い敷地内に門や土蔵がいくつも建ち並び、増築を重ねた母屋は、江戸時代初期に建てられた築三百数十年の建物。天井を見上げても真っ暗で何も見えません。祖母からは白い蛇が守り神として住んでいる、なんて話を聞かされてきました。最後の増築は大正時代のもの。曾祖父がバイオリンの練習に使っていたという洋風の洋室で、派手な色ガラスがはめ込まれていました。

この母屋が、大学二年の頃に取り壊されることになり、地元消防団や警備員、親戚はじめ大勢の人が集まって解体作業を行いました。棟木などは直径一メートルもあって、真っ黒に煤けていました。建築が解体されてゆく姿を目の前にして感動したことを、印象深く覚えています。

かつての建築の空間構成は、社会生活と深く結びついていました。たとえば、昔の庄屋のつくりは、年中行事を執り行えるように設計されていました。私の祖父の葬式するときなど、まるで大昔の社会の形が再現されたかのようでした。あの昔の家は、葬式など様々な儀式ができるようにつくられていたのです。僧侶は仏間に続く専用の門から出入りし、人々の

現代社会、人間社会を根底から裏返してみる視点。クールな批判精神をもつスーパースタジオのアイロニー。

学生の頃、建築そのものより社会の仕組みの方に興味がありました。当時は学生運動が一段落した頃で、政治活動に限界が見えてきて、芸術や音楽で政治的発言や表現をすることに

関心が移っていきました。ところが、純粋芸術ではない建築学は、どうしても社会批判にも反体制にもなりにくい。発注者の要請に従って「権威」や「権力」といったものをいかに表現するかということが建築の分野でははずせなかったのです。こんな古臭い硬直した世界に、未来はないと思いつめていたところに出会ったのが、フィレンツェの若い建築家グループ「スーパースタジオ」が描いた「12の理想都市」でした。これは、一九七一年に「都市住宅」誌上で「スーパースタジオ」あるいは「洪水の跡」と題された磯崎新さんの小論付きで紹介されたものでした。

私の頭の中にはなかった考え方がそこには示されていました。幻想の仮想空間こそが現実で、現実社会が虚構たり得るのではないかとアイロニカルな視点は、まわりの連中がヒッピー文化にとりつかれ、カミュの「異邦人」の不条理に酔っていた私にとって衝撃的で魅力的で新しい社会の予感を感じさせるものでした。

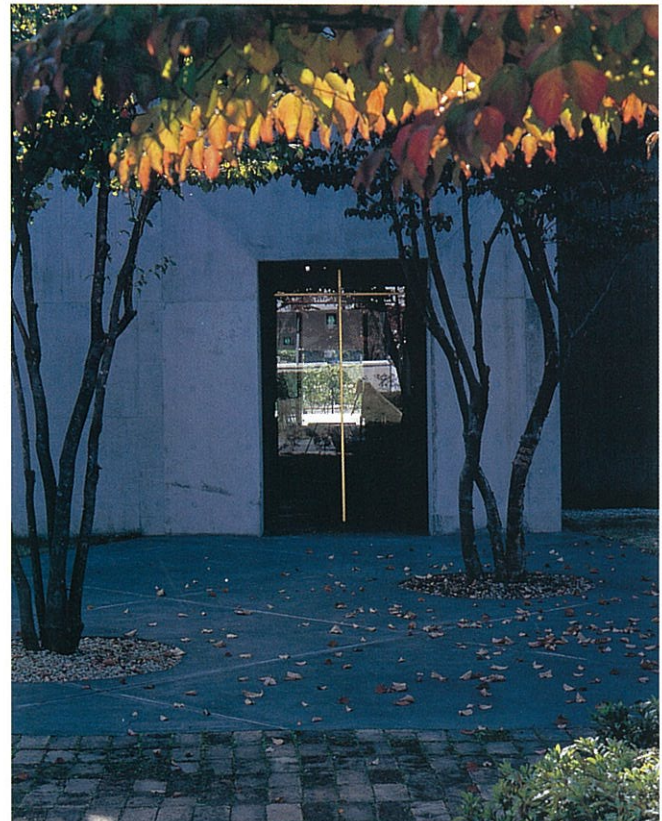


日本建築学会賞作品賞を受賞した「ビッグレットふくしま」の炭素繊維強化樹脂製大型キャノピー。

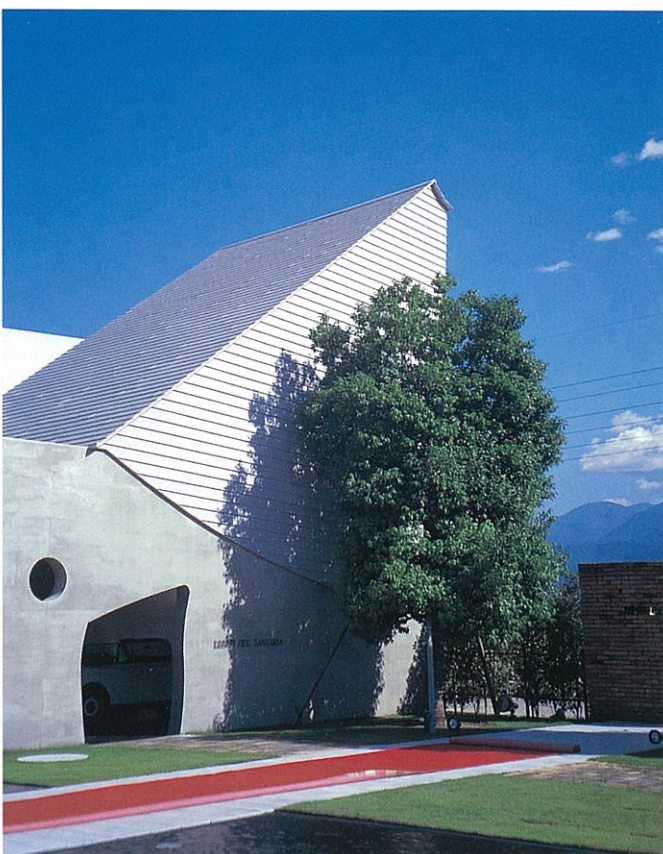
配置は厳格なヒエラルキーに従っていました。参列者の喪服には、丸にアゲハチヨウの家紋がついていて、黒地に白く浮かび上がった暗い闇の中に白いアゲハチヨウがいくつか舞って、中門を出て、石畳を進んでゆくかのような幻想的な光景だったのです。

そんな体験が建築に興味を持つきっかけになったのかもしれませんが、点々と椰子の木が生える砂漠のオアシスに、数百年前から繰り返して建てられてきた日干し煉瓦の住宅が残っていました。これを図面に起こす作業です。廃墟になったところでは、半分崩れていて、層状になった高さ二〇メートルを越える建物の断面が見え、美しいものでした。サウジアラビアの砂漠には二年半ほど滞在しました。その間にいろいろな体験をしました。ピーシャという街では、白昼突然の電のため人口二千人の都市が壊滅する瞬間にも居合わせました。日干し煉瓦と泥でつくられた建築ですから直徑数センチもある電ではひとたまりもありません。建築が崩れ都市が消えてゆく光景には、恐怖を越えたものがあるように思います。

点々と椰子の木が生える砂漠のオアシスに、数百年前から繰り返して建てられてきた日干し煉瓦の住宅が残っていました。これを図面に起こす作業です。廃墟になったところでは、半分崩れていて、層状になった高さ二〇メートルを越える建物の断面が見え、美しいものでした。サウジアラビアの砂漠には二年半ほど滞在しました。その間にいろいろな体験をしました。ピーシャという街では、白昼突然の電のため人口二千人の都市が壊滅する瞬間にも居合わせました。日干し煉瓦と泥でつくられた建築ですから直徑数センチもある電ではひとたまりもありません。建築が崩れ都市が消えてゆく光景には、恐怖を越えたものがあるように思います。



サンタリア聖教会の北玄関に金箔仕上げの十字架が立っている。



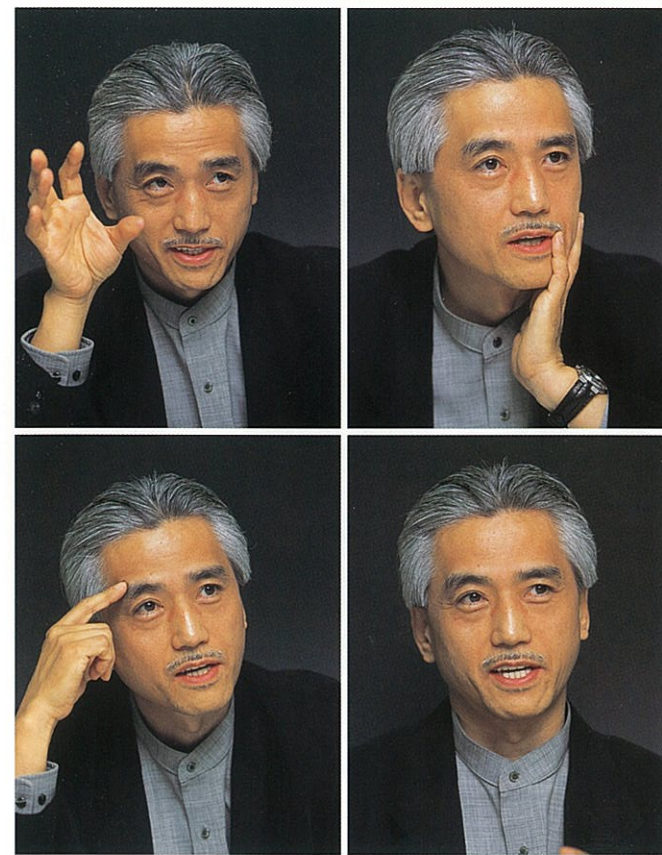
緑豊かな公園のような工業団地「アリア」の中に行むサンタリア聖教会の鐘楼。



グッドデザイン賞を受賞した「アリア」の広場ティンブルに面した建築。

桑畑に遊ぶ蝶、シートテハの美しさに目を見張る。自然のディテールがもつ美しさに圧倒される。

私が初めて設計のコンペに応募したのは東京芸大の四年の時でした。「新建築」誌の国際建築デザインコンペです。それは今でいう環境共生住宅みたいな考え方で、森の中に埋まっているような集合住宅でした。十階建てくらいの高さで柱がなく、壁の集積による積み木のようなフォルム。樹木の緑の間にやっとな建物が見えるという、いかにも建築にあまり興味のない学生が考えたデザインでした。コンペでは幸いにも一位になりましたが、私にとっては、特に地球環境とか緑化を意識していたわけではなかったのです。高校を卒業するまで信州の至るところを遊びまわって、春は蝶を追って、秋はきのこ狩りに明け暮れていた私にとって、自然はとても身近なものでした。



少年時代の私は、山に入れば匂いできるのがどこにあるかわかりましたし、昆虫、例えば蝶がどんな生活をしているのか知っていました。昆虫の骨格や色彩の美しさを思うと、人工物などは比較になりません。自然の中には人智を超えた美があると思っていました。美の感覚や概念は人間がつくったものなんですけどね。そんな体験が集合住宅を緑で消してしまおうというアイデアを生んだのだと思います。

現代人は自然現象を感じる能力を失ってしまっているのではないのでしょうか。弱くなって、退化しているように感じられてなりません。折口信夫が「現代人は古代人よりはるかに劣っている」と警告した通りです。

## 自然に溶け込んだ蜚舞う森のアカデミーは 古代工法と先端技術による新しい木造建築。

結果的に、木の接合部にはむやみに銅板を用いず、木の異方性を活かした木造仕口の原理を応用。集成材もなるべく使いませんでした。さらに、岐阜県産の木造住宅用市場流通材（スギなどの針葉樹）を活用し、安価な外国産集成材に対抗してきました。施工業者も県内から二七社が参加し、そのとりまとめも大変でした。様々な難題がありました。最も苦心したのは修景です。すでに土木工事がさされて、自然の環境が壊され、深刻な状態でした。環境保全、自然保護の観点から言えば、旧来の土木造成のやり方は間違っています。ましてこの施設は、森林と森林文化について学ぶ県立の教育研究機関なので、ここで妥協することはできません。波風が立つことは覚悟の上で、県庁の皆さんにお願いをして、修景計画を採用してもらいま

岐阜県立森林文化アカデミーに対しては、つい先頃エコビルド賞をいただき、これでこの作品への六つ目の賞になります。森林文化アカデミーですから、建築そのものが教材となるように独創的な木材の使い方を考えたいと思いましたが、木は生きものなので、なるべく金属を使わずに作りたかったのです。幸いにも画期的な木造架構を、稲山正広さんという若い優秀な研究者と協力することによって成功させることができました。彼は日本古来の木造の古建築に詳しく、「金物を使わないで作ることは可能ですか？」と聞くと、「まだ一度も実際にやったことはいないけれど、理論的にはできます」との答え。私は新しい可能性に賭けました。



岐阜県立森林文化アカデミーの8ヘクタールに及ぶ敷地全体の修景マスタープラン。

た。コンクリート製の側溝には唐松の角材で蓋をして散策路を作り、巨大なコンクリートの調整池は間伐材で覆ってコミユニティステージとするなど可能な限りの修景をしました。こうした修景により、自然景観の美しさを保全するだけでなく、敷地内を流れる小川に蜚が戻ってくるなど、地元の方々からもたいへん喜ばれています。



構造金物を用いない日本古来の木造を単純化し現代建築に応用した「岐阜県立森林文化アカデミー」。間伐材を8万6千本使用、21世紀の木造建築の扉を開いた。

## 「木陰の駐車場」をつくらう

近代的な都市では歩車分離という考え方の流れがありました。今では少し変わってきています。目的のすぐ近くに駐車できる利点が見直されています。

私は「ビックパレットふくしま」を設計した際、七百台のパーキングスペースを、当初は森の中に作りたいと提案していました。木陰の駐車場です。残念ながら予算的な限界があつて、「木はあとでも植えられるから」と却下されてしまいました。

機械式地下駐車場は、大変便利なものですが、コストさえクリアアメントに承けていただければ、積極的に取り入れていきたいと思います。また、これからの可能性として、壁面を緑化したり、あえて車の移動を隠さず、透明なガ



ラスを使って見せていくなど、パーキングそのものを美しいものとしてとらえてゆく発想も、面白いのではないだろうか。



## PROFILE

1951年長野県生まれ。東京芸術大学卒業。 同大学院修了後、国内外で設計修業。  
1982年(株)北川原温建築都市研究所を設立。  
マラルメの詩をモチーフに建築や都市を構想するなど、文学や美術を参照した個性的な設計で国際的に知られている。主な作品にメトロサ (日本建築家協会新人賞)、アリア (グッドデザイン賞金賞、日本建築学会作品選奨)、宣伝会議本社、ONE OF A KIND (ベッシー賞)、不知火町立図書館美術館 (日本図書館協会建築賞、日本建築学会作品選奨)、ビッグパレットふくしま (日本建築学会賞作品賞)、豊昭学園豊島学院高校、岐阜県立森林文化アカデミー (日本建築学会賞技術賞、BCS賞、エコビルド賞、カナダグリーンデザイン賞)、港区立みなと荘、日本PENクラブ、皇居外苑休憩所など。  
現在、東京芸術大学助教授。

ホームページ [www.kitagawara.co.jp](http://www.kitagawara.co.jp)

## 光のシャワー、浮遊する逆さの黒い円錐。 キリアンとコラボレートした舞台美術への挑戦。

思い出深い仕事の中には、モダンバレエの巨匠、イリ・キリアン氏の舞台美術を手掛けた「ワン・オブ・ア・カインド」があります。

十年近く前のある日、キリアンは突然私の事務所を訪ねて来ました。それが初対面。私は彼が世界的に著名な振り付け師であることなど知りもせず、変な外国人が来たぐらいに應對しました。キリアンはオランダの建築雑誌に紹介された私の作品を見て興味をもち、日本公演のときにアトリエを訪ねてきてくれたのでした。

数年後に、ネザーランド・ダンス・シアターの新作の舞台美術を依頼したいとのオファーがありました。何と云って対面。私は彼が世界的に著名な振り付け師であることなど知りもせず、変な外国人が来たぐらいに應對しました。キリアンはオランダの建築雑誌に紹介された私の作品を見て興味をもち、日本公演のときにアトリエを訪ねてきてくれたのでした。

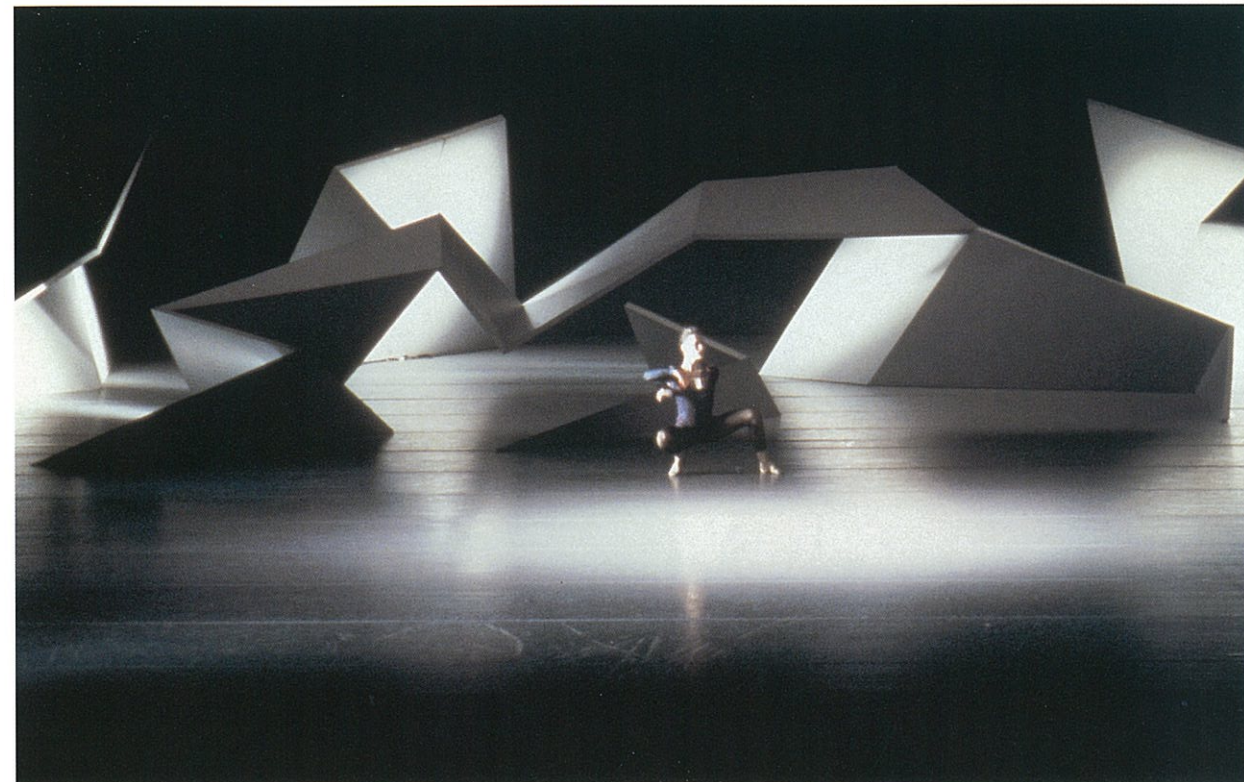
私は三つのオルタナティブを作った。オランダに飛びました。キリアンはじめ各部門のディレクターたちを前に説明を終えると、「すごく新鮮なアイデアだ。三つともやろう」ということになった。三幕構成の大作になったのです。

私はその舞台のテーマを「振動」と決め、身体と空間の関係を振動で表現しようとしていました。「振動」は哲学者ヴァーリスが「すべての物質は光になろうとしている」と言ったように、物体の本質を量子力学的なイメージで考えたものです。「ワン・オブ・ア・カインド」は、オランダの憲法制定百五十周年を記念して、政府によって依頼された作品でした。この舞台が憲法という社会的な主題をもつ

ていた点は、プロの舞台美術家ではなく、建築という仕事を通して社会と関わってきた私にとって、大きな手がかりであったともいえます。

最初の案ではスタティックな物体が実は光の速度で振動しているというイメージから、舞台に「振動する巨大なスプリング」を置き、「光のシャワー」を降らせました。空中を浮遊する巨大な円錐は、その不気味さと不安定さから知の集積や歴史的認識に対する「懐疑」「留保」を表し、黒い円錐には人間や社会の業を、白い布で表現したシスターには対局に置かれる「オネステイ」をイメージしました。私はこの舞台装置で歴史の功罪を表現したつもりでした。キリアンはしきりに、「舞台美術として考えるな。建築として考える」と言ってくれていました。

「ワン・オブ・ア・カインド」はハーグで初演され好評を博し、リヨン、パリのオペラ座、ウィーン、ベルリン、ニューヨークなど各都市で巡演され、モナコでニジンスキー賞を受賞し、私の担当した舞台美術がニューヨークで二〇〇〇年度のベッシー賞を受賞しました。キリアンと私がモダンバレエにおいて「身体が瞬間的に建築を構想する」という一致点を得たことが、このような結果をもたらしてくれたのだと思っています。



「ONE OF A KIND」第一幕。イリ・キリアンによる三幕構成のバレエ作品でその舞台美術を北川原氏が担当。ベッシー賞、ニジンスキー賞受賞。

- ※イリ・キリアン 現代屈指のモダンバレエ振付家。1947年ブラハ生まれ。73年よりネザーランド・ダンス・シアターの振り付けを行ない、芸術監督として世界的名声を得る。
- ※「ワン・オブ・ア・カインド」 1998年オランダ・ハーグで初演され、日本でも上演されたモダンバレエ作品。オランダ政府が憲法制定150周年を記念してイリ・キリアンに制作を委嘱した。
- ※ネザーランド・ダンス・シアター 1959年オランダ・ハーグで設立。イリ・キリアンのもと、新しいテクニックを使った新しい形式のダンスを目指し、世界でも注目されるバレエ団の一つ。
- ※ノヴァリス (本名フリドリッヒ・フォン・アルデンベルグ) 1772～1801。ドイツロマン主義を代表する詩人。哲学・宗教・政治・自然科学などにも通じ、代表作に「青い花」(未完)・「夜の讃歌」がある。
- ※ベッシー賞 ニューヨーク・ダンス・アンド・パフォーマンス賞のこと。その年ニューヨークで上演された舞台の中から最も優秀とされる舞踊振付家、ダンサー、舞台美術家などに与えられる、権威ある芸術賞。